

充していくことが必要であろう。

また東京では、二輪車の死者が148人で前年比27人と大幅に増加しており、二輪車に対する交通安全教育の徹底も必要である。

このほか、交通基本情報管理システムの整備などの交通安全対策、交通標識や道路照明などの交通安全施設の拡充、交通需要マネジメント（TDM）による自動車利用の適正化により、交通事故の減少にむけて最大限の努力を傾注し、安全な社会、安全な都市の実現を図るべきである。

## 6-2. 安全な社会・都市づくりと外国人問題（奥田道大）

### 6-2-1. 人口移動のグローバリゼーション

日本の高度経済成長＝バブル現象が最後のピークをむかえた1980年代末、中国大陸・韓国・台湾をはじめとする越境アジア系外国が団塊として来日し、東京・大阪の大都市圏中心市街地周縁＝いわゆる大都市インナーシティは、いわば郊外部と都心部との中間・境界領域にあたるが、もともとは1950～60年代を中心に「民族大移動」とえられた国内地方出身者の大都市圏への移動の最初の集住地でもあった。1970年代以降は国内地方移動者が下降化の一途を辿り、大都市インナーシティの衰退・空洞化時期をむかえるが、受け入れ側からすれば、この衰退・空洞を埋めるかたちで「国内移動者」から「国際移動者」へのスイッチの切り換えがはじまった、といえる。越境ニューカマーズとしてのアジア系外国人は、国内地方移動者の最初の「宿所」といえた「木賃アパート密集地」の空室を次々と埋めていった。筆者らが、団塊としてのアジア系外国人を迎え入れた豊島区東池袋4、5丁目界限（旧・日出町）を中心としてアジア系外国人1人ひとりの面接インタビュー調査を開始したのは、1988年であった。

質問は、4つの鍵質問を中心として実施されたが（Q1「あなたがこの国にきたのは何故か？」、Q2「あなたが耐え忍んだ（endured）事柄は何か？」、Q3「あなたが育んだ夢（dream）はなにか」、Q4「あなたがリアリティを持って受け止めた新しい発見、出来事は何か？」）、この成果はマス・コミ等でアジア系外国人に持たれていた「出稼ぎ型外国人労働者」「スラム・コミュニティ＝ゲッター住居の予備軍」などのイメージとは大きく隔たるものであった。池袋調査の2年後には、新宿で同様の面接調査を実施して、それらの成果は『池袋のアジア系外国人—社会学的実態報告』、『新宿のアジア系外国人—社会学的実態報告』のタイトルで公表して、話題を呼んだ。21世紀に入った現在では、「大都市衰退地区の再生」「大都市インナーシティを磁場とするコミュニケーションとエスニシティ」「トランスナショナル・コミュニティ」などのテーマで世界規模の調査プロジェクトへと展開しているが、筆者の実態調査は新宿/池袋を中心としてほとんど毎年のように実施されて、その結果は逐次公表されている。とくに1998年には、1988年の第1回調査から10年目をむかえたこともあって、『エスノポリス・新宿/池袋—来日10年目のアジア系外国人調査記録』とのタイトルでデータ・コレクションズを公刊した。タイトルのエスノポリス（Ethnopolis）・新宿/池袋は、新宿/池袋の大都市インナーシティが、両ウイングを郊外、都心に延ばしたかたちでの、21世紀システムの「多民族・多文化都市」の生成を物語っている。

### 6-2-2. 「越境」アジア系ニューカマーズの生き方と都市的適応様式

来日の動機は、個人それぞれであるが、総じて能動的・積極的なものがあること。また彼らは10年の在日歴を持ったとしても、国内と母国を含め国際的に定住と移住をくりかえしているケースが少ないこと、池袋や新宿の最初の居住地にあっては受け入れ側の地元日本人との共生を醸成したことは否めない。

同時に、彼らの後発組のニュー・ニューカマーズの場合、東アジア出身者だけではなく、東南アジア他に移動圏を広げてきているのが目立つ。このことは、ニューカマーズ、ニュー・ニューカマーズを含め出身移動圏の広がりだけではなく、東アジア中心＝勤勉・働き者・硬さ、東南アジア中心＝臨機応変・働きも遊びも・柔らかさともいうべき行動振舞いの違いも目立つようになる。しかし、東アジア、東南アジアを通じて、出身地と日本との間の距離間が情報ネットワークとして、社会＝心理距離として急速に縮まってきており、来日動機として「日本が近かったから」「日本は帰国しようと思えばいつでも帰れる」と回答した人々も目立ちだしている。

### 6-2-3. 「越境」アジア系ニューカマーズの現在

特に来日10年組を中心として、これまでのシングル中心からカップル中心、そして家族生活者がニューカマーズの多数派をなしてきている。配偶者は日本人をはじめとして、同国人、あるいは日本で知り合った同国人以外の外国人と幅がある。特に目立ち始めてきているのは、「新宿（池袋）生まれ、新宿（池袋）育ち」の子供達が保育園から小学校、そして中学校進学期が日程化されてきていることである。子供の中学校進学期は、子供の将来設計の問題をふくめ自分達の日本社会への帰属＝アイデンティティーズを本格的に決定する微妙な時期にさしかかっていることを意味する。面接調査がきっかけで1988年来日の台湾系家族（来日当時は双方ともにシングルで新宿で知り合う）と親しくなった大学院生は、「新宿生まれ、新宿育ち」の子供たちの将来設計を見込んで台北郊外にUターンした家族を台湾にまで追跡調査、2人の子供は大学を日本で過ごさせる、子供たち自身の台湾と日本との2重帰属、複合アイデンティティーズの本音の事実面を思い知らされてきた。

### 6-2-4. 「越境移住者の子供たち (Children of the Immigrants Study)」世界プロジェクトの発足

世界的にはアジア系をふくむ越境ニューカマーズの「移動と定住」「移民から市民へ (From Migrants to Citizens)」をめぐる問題群の解明は、越境先での家族連れ移動組の子供、いわゆる1.5世代、及び移住先生まれ、育ちの第2世代の調査研究が、「移民の子供たち (Children of the Immigrants) 研究」世界プロジェクトとして登場してきている。都市エスニシティ研究“先進国”のアメリカ合衆国では、アフリカ系、ヒスパニック系、そしてアジア系をはじめとする非白人系の越境大都市移住者の「子供たち」の問題が、アイデンティティーズをめぐる市民帰属、彼ら子供たちの将来設計を含めてリアリティある共通課題をなしている。

日本でも新宿/池袋のアジア系ニューカマーズの調査研究と並んで、アジア系と前後して

来日した日系南米人家族の実態調査がすすめられており、その成果が『エスニシティと都市』などで、相次いで公表されている。例えば日系ブラジル人の来日は、越境アジア系外国人とは違って日本の正規の受け入れ制度にのった来住で、単身者中心ではなく家族連れを中心としており、その意味で日本生まれ、日本育ちの子供たちの第2世代と区別して、1.5世代と名づけている。1.5世代の子供たちは、すでに中学卒から高校卒段階に達している。彼ら1.5世代は自分達が希望して、あるいは自らの希望づけにおいて来日したわけではないという事情も働いて、アイデンティティ自体も〈日本〉と〈ブラジル〉の間を揺れ動いて、人生設計も中途半端な状態にある。

#### 6-2-5. 越境アジア系ニューカマーズ増加の町丁別系統計データ

1) 例えば、東京大都市圏・新宿区について、越境アジア系外国人の1988-2000年の増加傾向を、町丁別外国人登録人口をデータ・ベースとして図表化したのが以下の図6-5から図6-17である(調査地域は図6-18を参照)。区全体としては8%程度だが、筆者らの調査フィールドである中心市街地周縁のインナーシティでは、町丁別外国人登録人口は12~16%前後に及んでいる。この数値は、町丁別高齢者人口比率と、ほぼイコールである。なかには外国人登録人口が33%台に及んでいる(大久保2丁目)のようなケースも見られている。以上の数値に見る外国人登録人口は、住民登録人口と同様に区役所に届けだされた行政統計人口数であって、いわゆる未届けの未登録人口を加えれば、この外国人登録人口比率はさらに大幅に増加することが、見込まれている。そして、外国人居住者人口増加の前線は、2002年現在、新宿では東中野・高円寺方面の既成郊外市街地へと外延化の傾向を見せている。それが新宿、あるいは池袋であれ、子供の教育環境を考えて郊外地に住まいを移動させる傾向も見逃せない。

1988-1998の10年間の外国人登録人口の伸びは、80年代末から90年代はじめの一時期を除いて、ゆるやかな増加傾向を見せており、したがってそれが区平均をはるかに上回る町丁であっても、外国人増加の圧力が地元町丁に“外圧”を与えるということはない。むしろインナーシティ街区では、エスニックな人びと及び景観が街区の日常風景と化している、といえよう。

2001年調査では、1988年以来のビッグ・スリーの中国大陸・韓国・台湾にならんでタイが台湾に並んで3位にくいこみ、このことは2001年以降には、東南アジア諸国からの一時滞在者以外の来日者の増加が見込まれるものと、予想される。なおこの傾向は、インタビュー調査の技術上の問題もからんでおり、調査第I期(1988-1993)では、「池袋のアジア系外国人」「新宿のアジア系外国人」の現地調査に見るように、大都市インナーシティの木賃アパート街区をターゲットとして、集中的に一人ひとりのインタビュー調査を実施した。第II期(1994-1998)では木賃アパート、ワンルーム・マンション、寮・社宅、共同住宅その他へと居住空間が分散した。第III期(1999-)では外国人一人ひとりのライフスタイルやニーズに応じて住まいの場所や様式が、多様・分散化の傾向を見せている。この点では、地元日本人居住者と住まいの様式や場所について区分けがなく、例えば「外国人登録人口」の比率の高い街区では、誰が「外国人」か「日本人」かの区分けをすることは、技術的に困難

である。したがって、2000、2001年調査では居住空間と結ぶストリート上の人を「アポなし突撃インタビュー」を実施したり、やはりストリート上の商店やファミリー・レストラン、あるいは街角、空き地、小公園、コミュニティ関連施設等に面接対象を広げた。そこでは一定の居住歴を経たファミリー層だけではなく、一時滞在者、留学生、研修生、訪問者、観光客等の新到着 (Newest arrivals) のニュー・ニューカマーズの人々が面接対象に改められたことは、当然である。

1988年以來の調査対象者の系譜からすれば (いわばオールド・タイマーズ化したニューカマーズ)、むしろ居住空間の特定街区に絞って、日本人、外国人をふくむ一戸一戸をいわば door to door にノックしてインタビューするという悉皆 (しっかい) 調査の方法が採用されてよい。「日本人」「外国人」の仕分けも大都市インナーシティの実態からすれば、実質上の意味を失っている。それでも「外国人調査」という建て前からすれば、面接調査段階で当の個人の出身地、国籍、さらにアイデンティティーズによる「日本人」か「外国人」かの属性上の区分けを調査者が判断すればよい。それにしても、もともと特定居住空間の人々の出身地や民族・エスニシティ、アイデンティティーズの異質・多様性を内包するアメリカ大都市の普通のコミュニティ調査を実施する段階に、日本の大都市インナーシティも漸く近づいたと判断できよう。日本大都市の地域コミュニティのグローバリゼーションの1頁が、21世紀にはいつて開かれたといえよう。

図6-5 大久保・百人町・歌舞伎町エリアの外国人居住者の推移

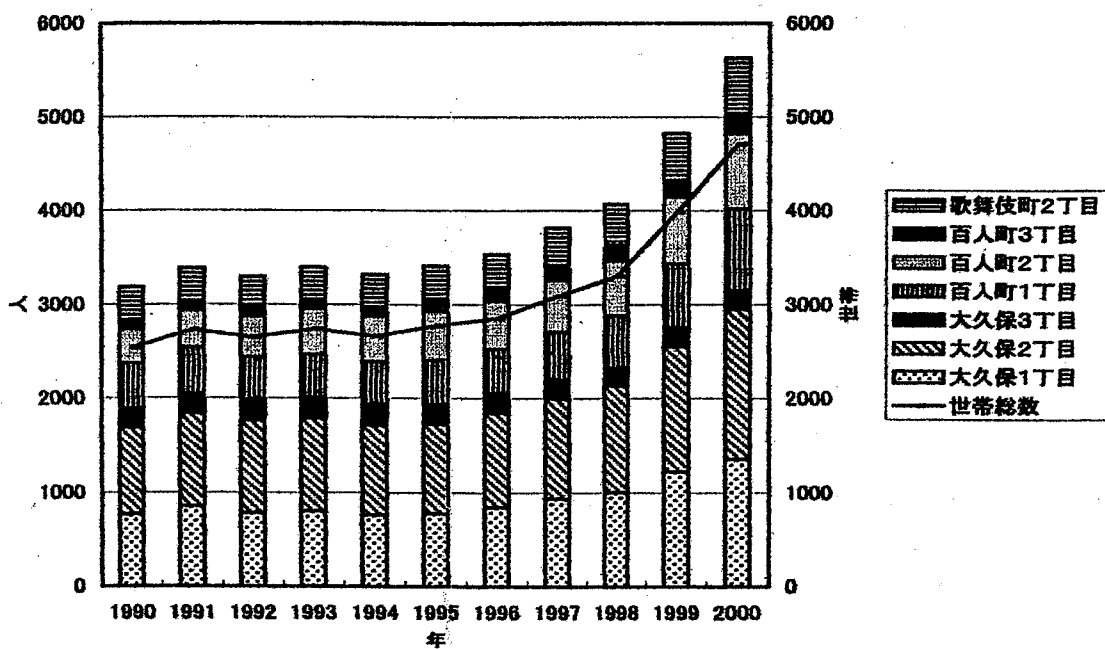


図6-6 大久保の外国人居住者の推移

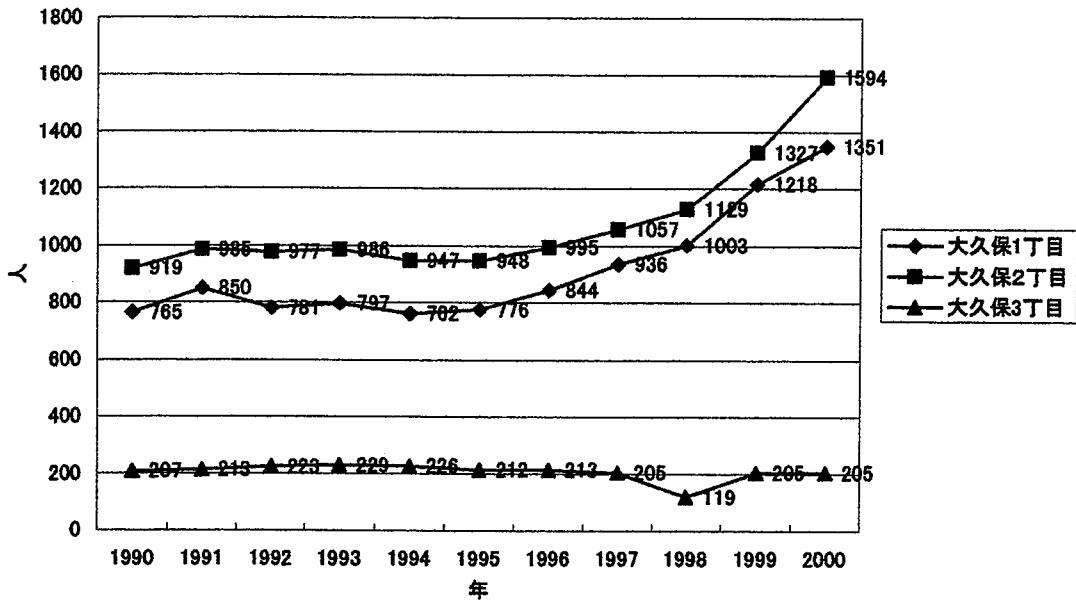


図6-7 百人町の外国人居住者の推移

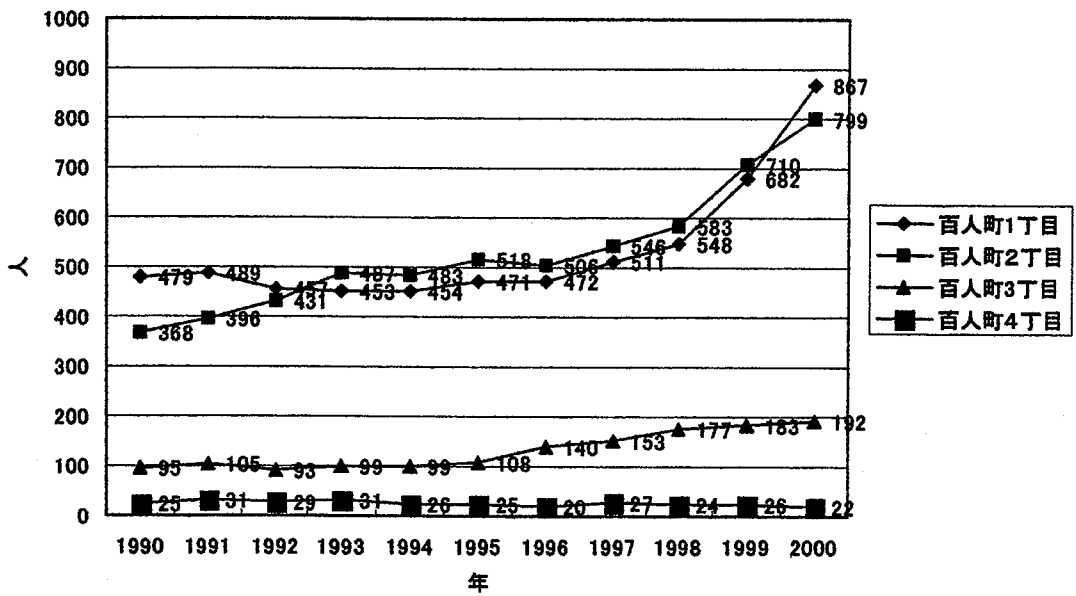


図6-8 歌舞伎町の外国人居住者の推移

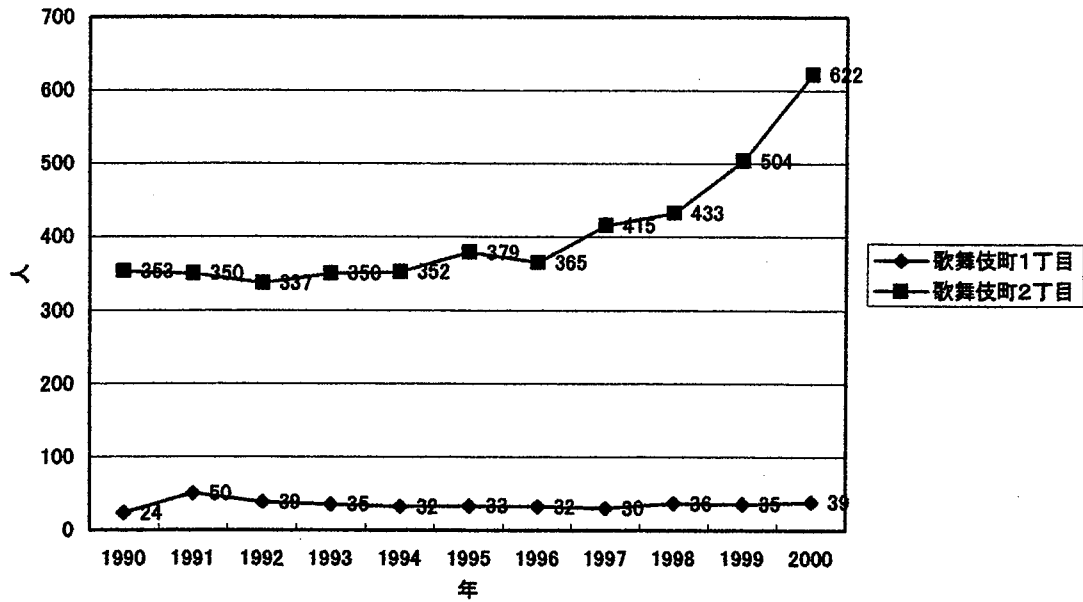


図6-9 北新宿・西新宿エリアの外国人居住者の推移

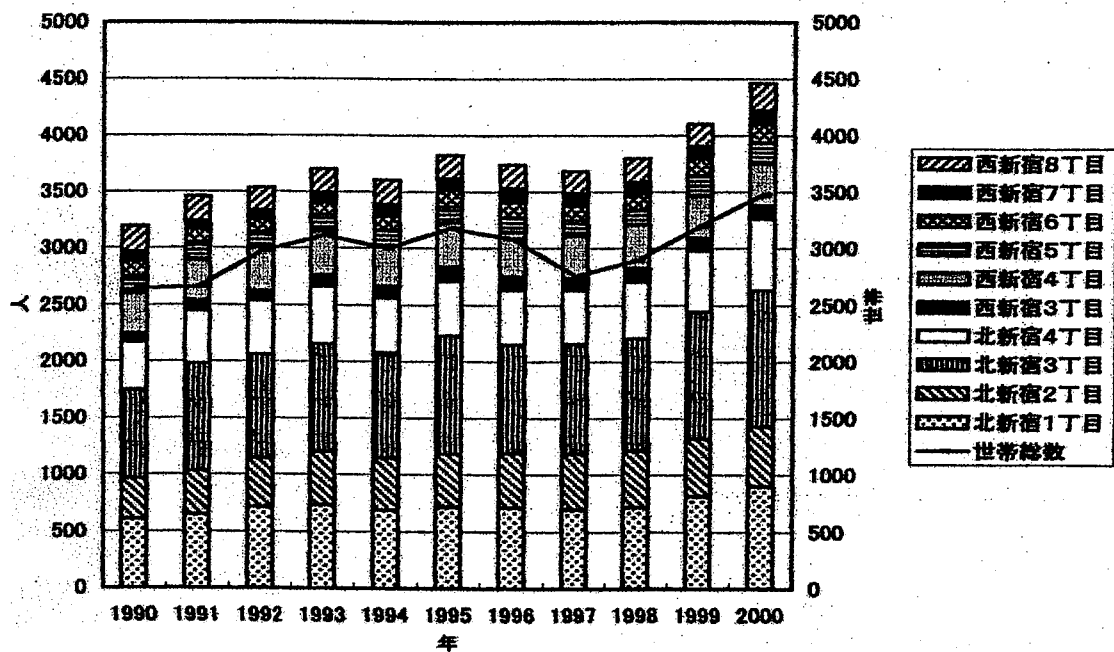


図6-10 北新宿の外国人居住者の推移

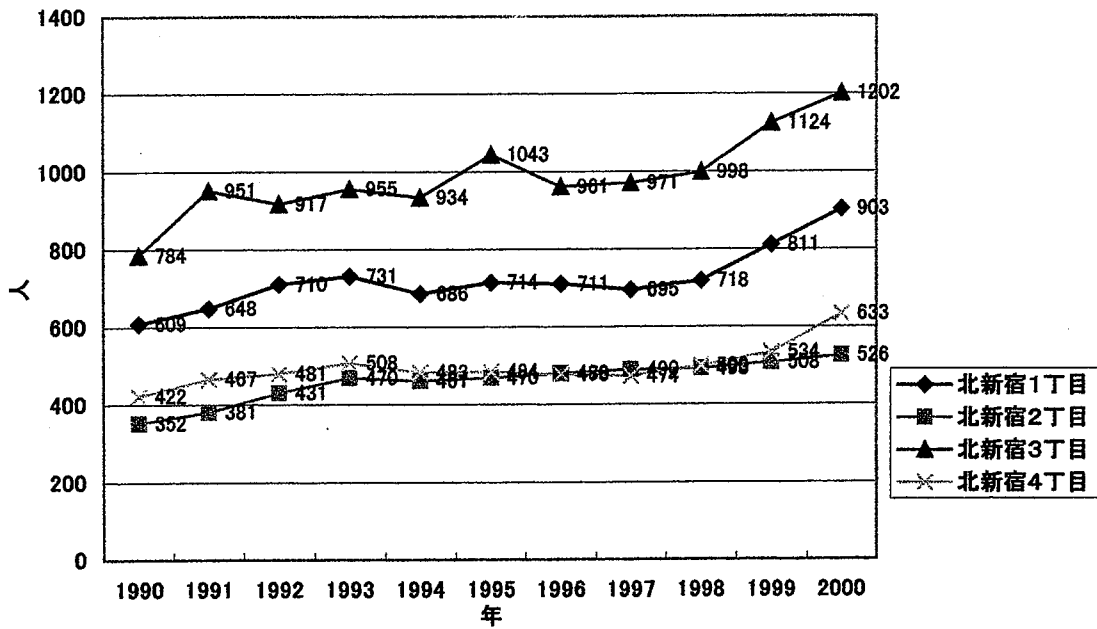


図6-11 西新宿の外国人居住者の推移

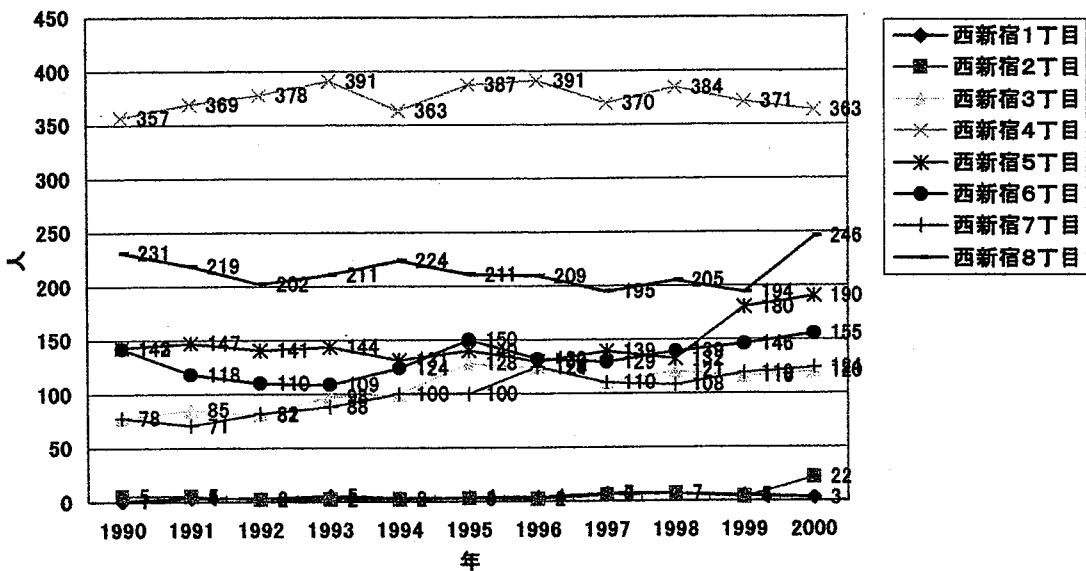


図6-12 新宿・戸山エリアの外国人居住者の推移

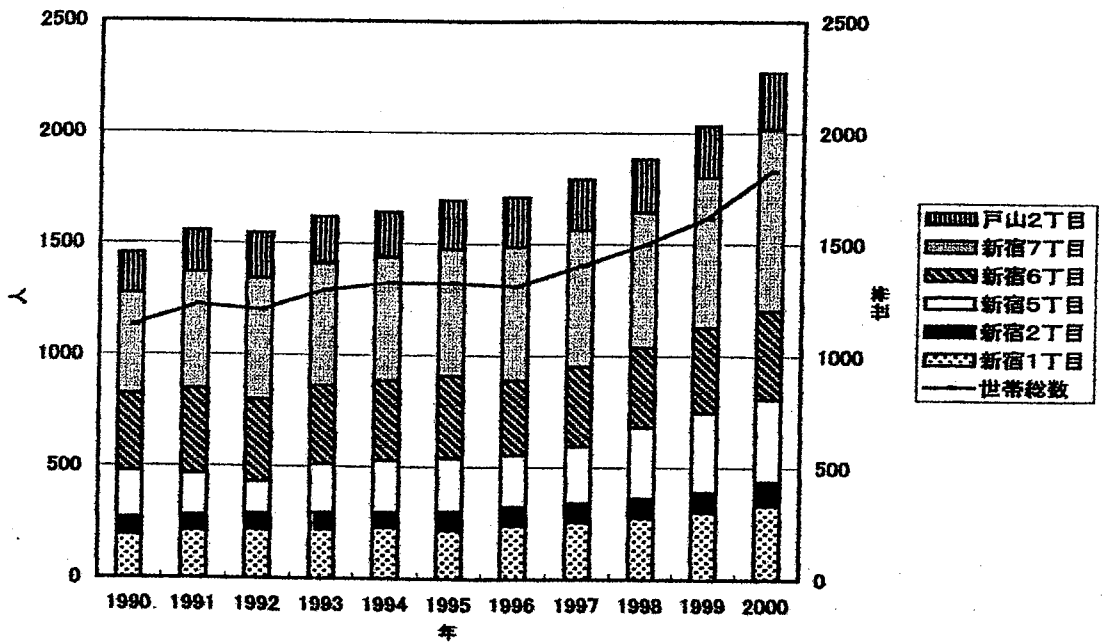


図6-13 新宿の外国人居住者の推移

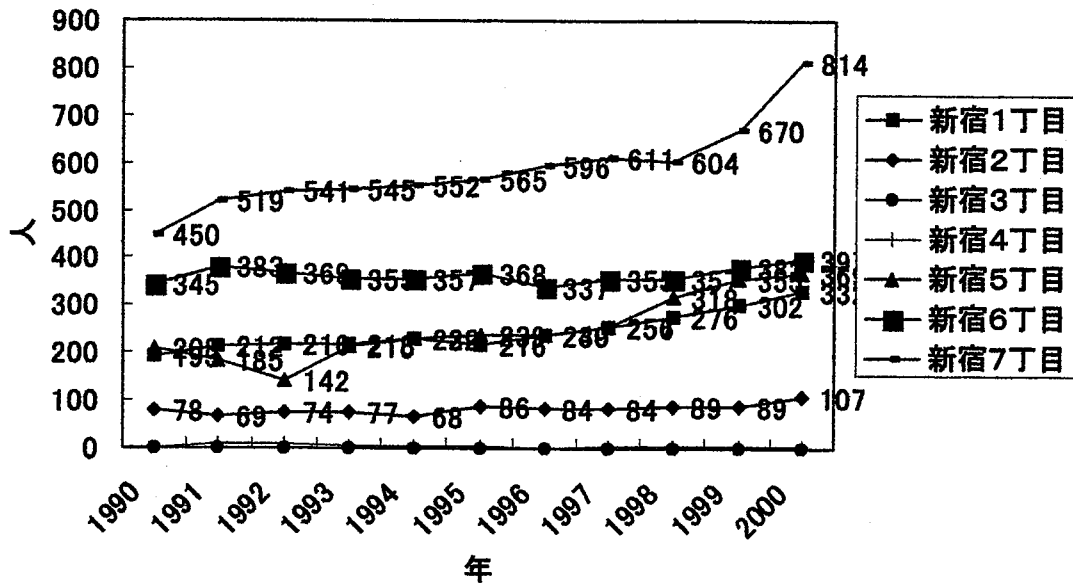




図6-14 戸山の外国人居住者の推移

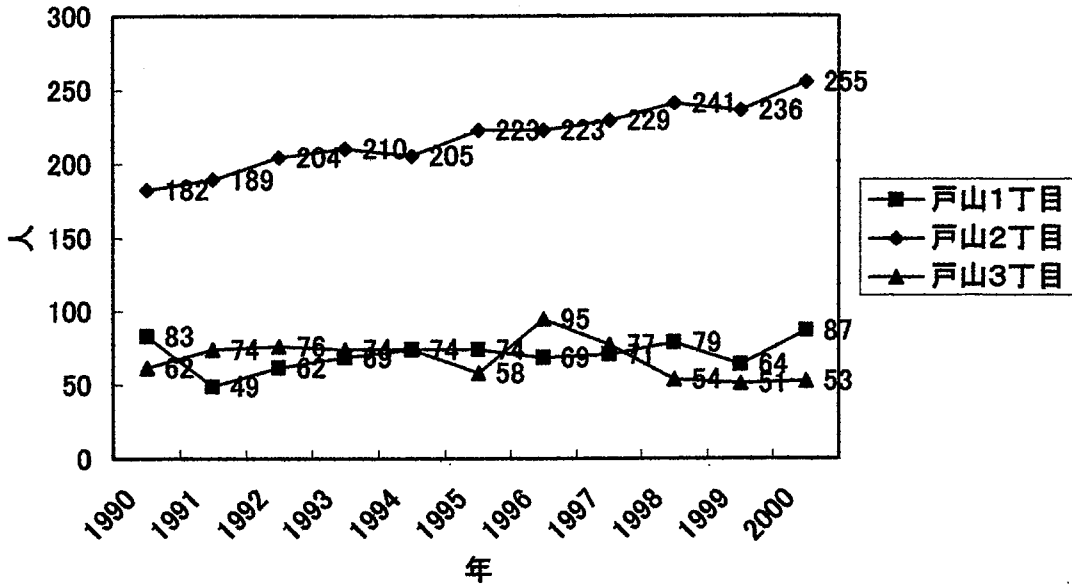


図6-15 高田馬場・西早稲田エリアの外国人居住者の推移

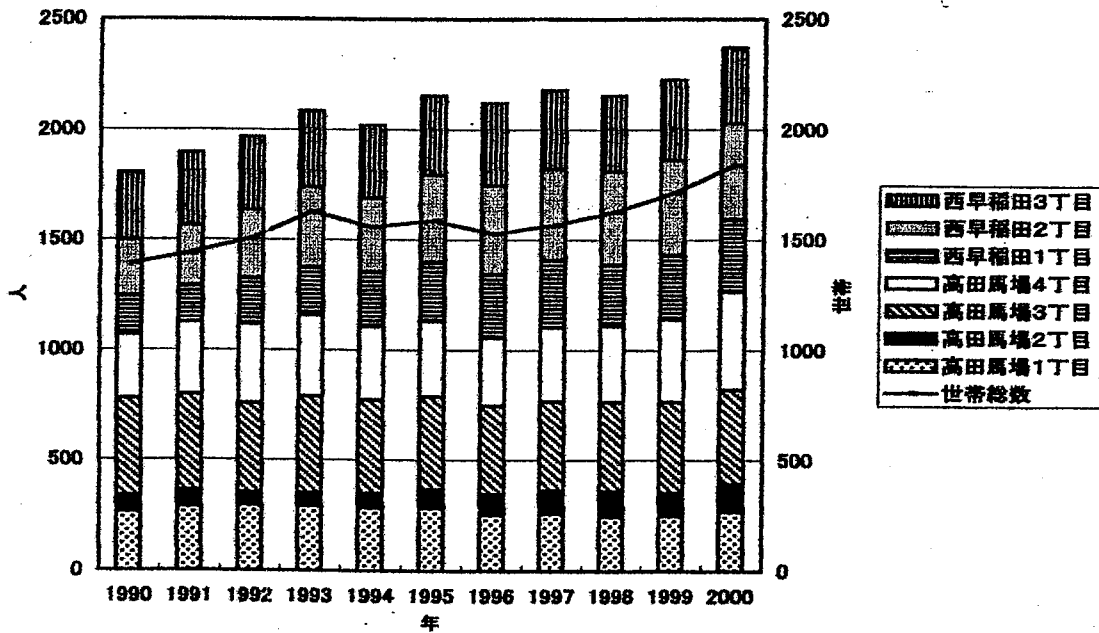


図6-16 高田馬場の外国人居住者の推移

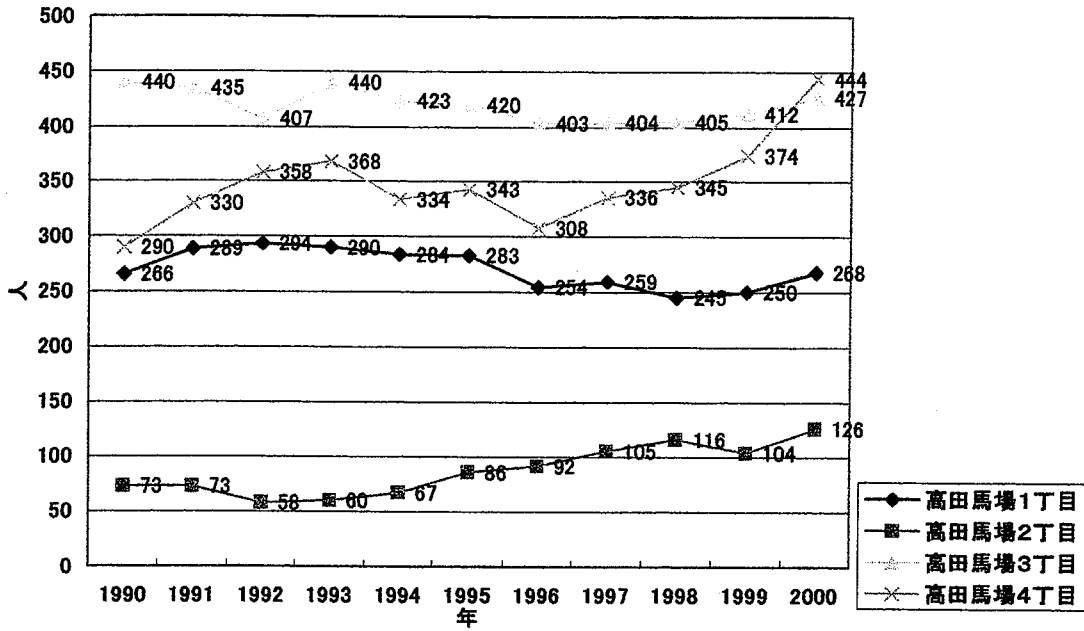


図6-17 西早稲田の外国人居住者の推移

